

# 保育者養成課程学生における言語表現の現状と課題

—「保育内容演習 (言葉)」の授業アンケートをもとにして—

清道亜都子

## A Questionnaire Study on Students' Linguistic Consciousness and Ability : A Case of Preschool Teachers' Training Curriculum

Atsuko SEIDOU

### 1 問題と目的

保育者を目指す学生は、子どもの言語発達を援助するために、また、保育者として日常的な職務 (保育日誌を書く、家庭との連絡ノートを書く、保護者とコミュニケーションをとる等) を遂行するために、まず自分自身が言語表現 (話すこと、聞くこと、書くこと、読むこと) に対する意識を高め、十分な運用能力を身につけておく必要がある。したがって、保育者養成課程では、保育者にとって必要な言語表現能力を高めるための指導を計画的に行うことが求められる。

近年、高等教育のユニバーサル化にともない、学部や学科を問わず、初年次教育で文章作成やスピーチ等、言語表現能力を高めるための指導を行っている大学・短期大学は多く、担当者による実践も報告されている (三原, 2010 ; 大島, 2005等)<sup>1)</sup>。しかし、筆者が調査した限りでは、保育者養成課程の学生を対象とした、言語表現に関する先行研究は佐藤 (2002)<sup>2)</sup> だけであり、内容も一般的な文章の書き方指導に関するものであった。そのため、将来保育者を目指す学生に対して具体的にどのような言語表現指導を行えばよいか、明らかになっているとはいえない。

そこで本研究では、保育者養成課程の学生が、入学直後の時期に言語表現に関してどのような意識や能力を持っているのか、まずその現状と課題を明らかにし、今後の指導に向けて手がかりを得ることを目的とする。

### 2 方法

短期大学部保育学科1年生 (すべて女性) を対象にして、筆者が担当する「保育内容演習 (言葉)」の初回授業 (2012年4月) においてアンケート調査を行った。すべての質問項目に回答し、回答内容を研究で利用することに同意が得られた者125名分を分析した。

質問は全部で10項目あり、質問1~7が選択式、質問8~10が自由記述であった。以下に、質問内容と選択肢を示す。

- ・質問1、本を読むことが好きですか (好き・どちらかといえば好き・どちらかといえば嫌い・嫌い)
- ・質問2、文章を書くことが好きですか (好き・どちらかといえば好き・どちらかといえば嫌い・嫌い)

- ・質問3、人前で話すことが好きですか (好き・どちらかといえば好き・どちらかといえば嫌い・嫌い)
- ・質問4、人の話を聞くことが好きですか (好き・どちらかといえば好き・どちらかといえば嫌い・嫌い)
- ・質問5、人と話し合うことが好きですか (好き・どちらかといえば好き・どちらかといえば嫌い・嫌い)
- ・質問6、幼稚園や保育園で、先生に絵本などの読み聞かせをしてもらいましたか (週2～3回以上・週1回程度・月1～2回程度・ほぼなかった・覚えていない)
- ・質問7、小さいころ家庭で、絵本などの読み聞かせをしてもらいましたか (週2～3回以上・週1回程度・月1～2回程度・ほぼなかった・覚えていない)
- ・質問8、あなたはなぜ保育者になりたいと思いましたか。きっかけや理由など、できるだけ具体的に書いてください。
- ・質問9、幼稚園や保育園で保育者が「子どもたちに言葉を指導する」とか「子どもたちの言葉の発達を援助する」というと、どのようなことを行えばよいと思いますか。できるだけ具体的に、思いつくだけ書いてください。
- ・質問10、保育者として子どもたちの言葉の発達を援助する上で、あなたが大切にしたいことや気をつけたいことは何ですか。できるだけ具体的に書いてください。

### 3 結果と考察

#### (1) 回答者自身の言語表現活動に対する意識について (質問1～5)

質問1～5では、回答者が自分自身の言語表現活動 (「本を読むこと」、「文章を書くこと」、「人前で話すこと」、「人の話を聞くこと」、「人と話し合うこと」) に対して、どのような意識を持っているか、「好きか嫌いか」という点について質問した。その結果を表1に示す。

表1 質問1～5に対する結果 (人数と割合)

	好き	どちらかといえば好き	どちらかといえば嫌い	嫌い
本を読むこと	35 (28.0)	51 (40.8)	33 (26.4)	6 (4.8)
文章を書くこと	10 (8.0)	27 (21.6)	70 (56.0)	18 (14.4)
人前で話すこと	11 (8.8)	39 (31.2)	64 (51.2)	11 (8.8)
人の話を聞くこと	73 (58.4)	49 (39.2)	3 (2.4)	0 (0)
人と話し合うこと	49 (39.2)	57 (45.6)	17 (13.6)	2 (1.6)

(注) 回答者125名。( )内は百分率。

「好き」または「どちらかといえば好き」と答えた者が、「本を読むこと」、「人の話を聞くこと」、「人と話し合うこと」と比べて、「文章を書くこと」、「人前で話すこと」では少なかった。「本を読むこと」は、約7割の回答者が「好き」または「どちらかといえば好き」と答えていた。「本を読むこと」に対して「好き」という感情を持っていることは、保育者を目指す学生にとって望ましいが、普段、授業テキスト以外の本を読んでいる姿はあまり見られず、学生の意識と行動の差もうかがわれた。

## (2) 回答者自身の幼少時における読み聞かせ経験について(質問6・7)

質問6・7では、回答者が幼少時に読み聞かせをしてもらった頻度を質問した。その結果を表2に示す。

表2 質問6・7に対する結果(人数と割合)

	週2～3回以上	週1回	月1～2回	ほぼなし	覚えていない
幼稚園等	49 (39.2)	40 (32.0)	2 (1.6)	0 (0)	34 (27.2)
家庭	52 (41.6)	27 (21.6)	11 (8.8)	14 (11.2)	21 (16.8)

(注) 回答者125名。( )内は百分率。

幼稚園等と家庭、いずれにおいても、日常的に読み聞かせしてもらった者(6～7割)と、ほとんど経験や記憶がない者(3～4割)に二分された。

さらに、この結果をもとにして、幼稚園等と家庭、いずれにおいても週1回以上読み聞かせをしてもらった経験のある者を「読み聞かせ経験・多群」、いずれにおいても月1回以下の者を「読み聞かせ経験・少群」としたところ、「読み聞かせ経験・多群」が64名(51.2%)、「読み聞かせ経験・少群」が21名(16.8%)であった。

それぞれについて、質問1(「本を読むことが好きですか」)の回答を集計し直したところ、「読み聞かせ経験・多群」は「好き」19名(29.7%)、「どちらかといえば好き」32名(50.0%)、「どちらかといえば嫌い」11名(17.2%)、「嫌い」2名(3.1%)、「読み聞かせ経験・少群」は「好き」6名(28.6%)、「どちらかといえば好き」4名(19.0%)、「どちらかといえば嫌い」9名(42.9%)、「嫌い」2名(9.5%)となった。この結果を、全回答者を対象とした質問1の結果と比べると、「読み聞かせ経験・多群」は、どちらかといえば「本を読むことが好き」という者が多く、「読み聞かせ経験・少群」は、どちらかといえば「本を読むことが嫌い」という者が多いという傾向が見られた。

## (3) 回答者自身の文章表現力について(質問8)

質問8では、回答者がどの程度の文章作成能力を持っているか確かめるために、保育者養成課程に入学した学生が書きやすい内容(保育者を志望したきっかけや理由)の質問を設定した。字数は自由、箇条書きでもよいが、文章(書き言葉)で書くよう指示した。

その結果、平均字数は143.6字(11～296字)で、97名(77.6%)に1か所以上の文法・表記上のミスが見られた。漢字、敬語、話し言葉の使用、文法に関する明らかなミスだけを含め、一文が長い、等の評価基準が曖昧なものは含めなかった。

ミスの具体的事例として、漢字では「親頼」(信頼)、「責極的」(積極的)、「想談」(相談)、「脳む」(悩む)、本革的(本格的)、敬語では「妹をお世話する」、話し言葉の使用では「～って」、「～とか」、「(文頭で)あと～」、「(文頭で)けど～」、「(文頭で)なので～」、「～じゃなくて」、「～してる」、文法では「ら抜き言葉」や「主語と述語の不对応」等が見られた。

## (4) 子どもの言語発達を援助することに対する意識について(質問9・10)

質問9・10では、子どもの言語発達を援助するために保育者は何をすればよいか、回答者自身の意識を質問した。

質問9の結果を表3に示す。「幼稚園や保育園で保育者が行うこと」という質問文であった

せいか、絵本の読み聞かせ、歌を歌う、言葉遊び、紙芝居、等の具体的活動が多く挙げられた。また、言ってよい言葉と悪い言葉の区別やあいさつ等を教える、等の直接的な指導や、子どもと話したり子どもの話をよく聞いたりするという、子どもとのコミュニケーションを指摘していた者も多かった。それに対して、自分自身の言葉遣いに注意することを挙げていた者は比較的少なかった。

表3 質問9に対する結果 (人数と割合)

絵本の読み聞かせ	83 (66.4)
歌を歌う	39 (31.2)
正しい言葉の使い方を教える	39 (31.2)
子どもと話す・子どもの話を聞く	35 (28.0)
自分自身の言葉遣いに注意する	28 (22.4)
言葉遊び	26 (20.8)
あいさつ	23 (18.4)
紙芝居	19 (15.2)
劇・ごっこ遊び	9 (7.2)
テレビ・ビデオを見せる	3 (2.4)

(注) 回答者125名。( )内は百分率。

質問10は「あなたが大切にしたいことや気をつけたいこと」という質問文であったせいか、「自分自身の言葉遣いに注意する」が80名(64.0%)と、最も多かった。その他は、「正しい言葉の使い方を教える」が36名(28.8%)、「子どもと話す・子どもの話を聞く」が22名(17.6%)であった。

#### 4 総合考察

本研究の目的は、保育者養成課程の学生が、入学直後の時期に言語表現に関してどのような意識や能力を持っているのか、その現状と課題を明らかにし、今後の指導に向けて手がかりを得ることであった。

調査の結果、言語表現の中でも、特に「文章を書くこと」と「人前で話すこと」という、保育者の日常的な職務に不可欠な部分に苦手意識を抱いている者が多いことが明らかとなった。一つの要因として、学生が入学以前に「文章を書く」、「人前で話す」経験が少なかったことが考えられる。したがって、その抵抗感を少しでも減らすためには、まず慣れることが大事であり、授業で書く機会や発表する機会を増やす必要がある。

子どもの言語発達を援助するために保育者がすべきこととしては、「絵本の読み聞かせ」等の様々な活動を挙げる事ができていた。ただし、「とりあえず、絵本を読めばいい」というような回答も相当数見られた。例えば、何歳児に、どのような場面で、どのような絵本を読むか、という具体的な援助方法までは想定できていないことがうかがわれるため、授業で補っていくことが求められる。

また、子どもの言語発達を援助するために保育者がすべきこととして「自分自身の言葉遣いに気をつける」ことを挙げた者は比較的少なかったため、日頃から自分がどんな言葉で話して

いるのか、学生自身に意識するよう促していく必要がある。

基本的な文章作成能力という点でも表現・表記上のミスが多く見られた。ミスを指摘し訂正させることは重要であるが、それによって書くことへの抵抗感が増す可能性もある。書くことへの抵抗感を減らすには、多少のミスは気にしないで、書く内容を重視し、まず書いてみようという方向に促す方が良いかもしれない。

保育者には、子どもや保護者とのコミュニケーションの手段としての言語表現と、自分の保育実践を振り返るために考える道具としての言語表現、という両方が求められる。学生が十分にその力をつけるために、保育者養成課程においてどのようなカリキュラムや教育内容が必要か、具体的に考えることが今後の課題であろう。

## 5 注・引用文献

- 1) 三原容子 (2010) 多人数クラスにおける文章作成法授業－教員の労力を削減して効果を上げる試み－東北公益文科大学紀要, 19, 169-198.  
大島弥生 (2005) 大学初年次の言語表現科目における協働の可能性－チーム・ティーチングとピア・レスポンスを取り入れたコースの試み－大学教育学会誌, 27 (1), 158-165.
- 2) 佐藤達全 (2002) 保育科学生の文章表現力について. 育英短期大学研究紀要, 19, 69-80.

